

足軽（歩兵）の居住地

加賀藩（金沢を中心とする封建時代の石川）では、足軽（歩兵）は「組地」と呼ばれる指定された居住地に住んでいました。これらの地域には、約 10 の敷地が連続して並んでいました。一家族に割り当てられた土地の大きさは、およそ 230 平方メートルまたは 165 平方メートルでした。

土地の各敷地は生垣で囲まれ、屋敷と庭に分かれていました。足軽の家は約 66～82 平方メートルの 1 階建ての建物でした。彼らの家は、しばしば、「妻入り」と呼ばれる、建物の入口が切り妻側にある形でした。瓦が建物にとって重すぎるので、屋根板に石を置く形をとっていました（瓦は、もっと身分の高い者のためのものでした）。必要に応じて排水ができる排水システムもありました。家の周りの残りの部分は、しばしば庭として使われました。ここでは、野菜や桃、梅、柿やその他の果樹を栽培していました。

加賀藩の足軽は一戸建て住宅に住んでいました。これは江戸時代（1603—1867）では珍しいことです。他のほとんどの地域では、足軽は「長屋」に住んでいたのです。長屋のような家では、壁によって内部が分離されていました。多くの設備が共有され、プライベートスペースは限られていました。これに対し、加賀藩の足軽屋敷ではある程度快適な居住環境が得られました。コンパクトではあるものの、庭付きの家はそれぞれ独立していたからです。

加賀藩の足軽屋敷のユニークな特色は、空間の分け方、つまり大きく見ると接客スペースとプライベートスペースが分けられていたことです。接客スペースには、玄関、玄関の間、座敷があり、いずれも家の片側に配置されていました。反対側でつながっている流し、茶の間、納戸、鍵の間は、ほぼプライベートスペースでした。

このようなコンパクトで、一戸建ての足軽の屋敷は、1868 年に近代化が始まってから日本で普及した独立型住宅のモデルとなりました。もっとも、近代家屋は 2 階建てであることが多いですが、江戸時代

の加賀藩では 2 階建てが禁止されていました。誰かの頭の上を歩くのが失礼だと考えられただけでなく、町の中心部にそびえる城に匹敵するような高さの構造が許されなかったからです。